

# アジア 3カ国における性格特性の比較

酒匂志野<sup>1</sup> 今城志保<sup>2</sup> ワンチェン<sup>12</sup> 小方真<sup>12</sup> 荘島宏二郎<sup>3</sup>

<sup>1</sup>株式会社リクルートマネジメントソリューションズ サービス開発部 <sup>2</sup>同 組織行動研究所 <sup>3</sup>大学入試センター

## 【背景】

近年、日本企業が海外現地法人において人材の適性を見極めたいというニーズが増えており、適性検査をグローバル展開することが求められている。従来、性格特性の比較文化を行った研究は数多く見られるが、ビジネスパーソンを対象とした研究はまだ少ない。そのため本研究では、職務遂行に影響を及ぼすと考えられる性格特性を比較することとした。比較する国としては、日本企業が今後海外進出の拠点とすることがますます増えると思われるアジアに限定した。なお、通常性格特性の異文化比較では翻訳の問題が指摘されることがある。今回はすべて英語で調査を実施することによって、翻訳の問題を除いて結果を検討できるようにした。

## 【方法】

日本、シンガポール、マレーシアのビジネスパーソンを対象に調査を実施した。  
 調査日 2013年5月20日～28日  
 調査方法 インターネット調査(調査会社に依頼)  
 調査対象者 日本、シンガポール、マレーシアのビジネスパーソン各100名(性別:男性のみ/年齢:30～49歳のみ/勤務先企業の従業員規模:500名以上のみ など)  
 調査内容:

性格2尺度(管理者適性検査「NMA T」(株式会社リクルートマネジメントソリューションズ)の「内向-外向」「繊細-強靱」尺度、各10項目、うち半数は反転項目、4件法)

性格2尺度の各国における望ましさ(4件法)

## 【結果】

基礎的な統計量、すなわち度数分布と項目間相関を確認した上で、探索的因子分析および確認的因子分析を行い、各国の因子構造と因子得点を比較した。

### 基礎的な統計量

#### ・度数分布

各項目の度数分布を国ごとに比較した。4つの選択枝への度数分布を見たところ概ね偏らずに分布していた。ただし、4肢を肯定側と否定側の2肢に統合

し、国ごとに平均選択率を見たところ、3カ国で違いが表れた。すなわち、マレーシアにおいては項目形式が反転項目であっても非反転項目であっても肯定側の選択枝が多く選択されていた。シンガポールにおいても「内向-外向」については同様の傾向が確認された。

尺度	項目形式	選択枝	平均選択率		
			日本	シンガポール	マレーシア
内向外向	非反転項目	(やや)あてはまらない	53.8%	24.4%	18.8%
		(やや)あてはまる	46.2%	75.6%	81.2%
反転項目	(やや)あてはまらない	(やや)あてはまらない	34.4%	25.2%	20.2%
		(やや)あてはまる	65.6%	74.8%	79.8%
繊細強靱	非反転項目	(やや)あてはまらない	51.0%	32.8%	24.2%
		(やや)あてはまる	49.0%	67.2%	75.8%
反転項目	(やや)あてはまらない	(やや)あてはまらない	65.2%	44.2%	35.6%
		(やや)あてはまる	34.8%	55.8%	64.4%

#### ・項目間相関

同様に、国ごとに同一尺度の10項目間で相関を算出した(反転項目については「外向」あるいは「強靱」になるほど得点が高くなるように処理を施して分析を行った)。日本、シンガポールにおいては概ね良好であった(「内向-外向」の項目間相関:日本:-0.177～0.660/シンガポール:-0.199～0.544。「繊細-強靱」:日本:-0.186～0.452/シンガポール:-0.352～0.551)。一方、マレーシアにおいては、半数近くの項目間相関が負になるという結果が見られた(「内向-外向」:0.350～0.514。「繊細-強靱」:-0.503～0.477)。非反転項目と反転項目の相関が負になるという特徴が見られたため、非反転項目であっても反転項目であっても肯定側に回答するという「黙従傾向」(Harumi, 2011)が現れていると推測される。そのため、以降の分析はマレーシアを除外した2カ国のみで行った。

#### 探索的因子分析(以下「EFA」)

「内向-外向」および「繊細-強靱」の計20項目を用いて国別に因子数が2のEFAを行った(最尤法、プロマックス回転)。なお、分析に用いたソフトはSPSS 15.0である。

2カ国において、1項目を除いてほぼ同じ因子に分かれた。各因子において、予め想定した因子のみに負荷量が0.4以上ある項目のみを残すと、2カ国において全く同じ項目が残り、各尺度において5項目ずつ、計10項目となった。その後、それらの項目

を用いて確認的因子分析を行った。  
確認的因子分析 (以下「CFA」)

EFAの結果選択された項目だけを用いて、多母集団のCFAを行った(なお、「繊細-強靱」で選択された項目はすべて反転項目であったため、解釈の容易さを考慮して、反転処理を施さずにCFAを行った)なお、使用したソフトはAmos 19.0である。

適合度の観点からモデル選択を行った結果、弱平行測定(因子から各項目へのパスおよび切片が群間で等値と仮定し、因子の平均と分散を自由推定)を仮定するモデルを採用した。

「内向-外向」において、カイ2乗=37.114、自由度=18、 $p < .005$ 、CFI=.935、RMSEA=.073であった。各国におけるパス、切片の値は右図の通りである。「繊細-強靱」において、カイ2乗=24.927、自由度=18、 $p < .127$ 、CFI=.967、RMSEA=.044であった。各国におけるパス、切片などの値は右図の通りである。

なお、2カ国で因子の平均値を比較すると、シンガポールは日本より「内向-外向因子」得点が高く(外向的であり)、「繊細-強靱因子」得点が高い(繊細である)という結果が見られた。また、シンガポールは日本より「内向-外向因子」得点の分散が小さく、「繊細-強靱因子」得点の分散が大きいという結果が見られた。

**【考察】**

マレーシアの結果において、黙従傾向が見られた。Harumi (2011)によると、マレーシア、メキシコ、フィリピンなどで黙従傾向が見られており、本調査の結果と一致する。また、マレーシア人学生の性格特性に関する研究(Mastor et al, 2000)によると、Agreeablenessが高いという結果が見られた。一般に、マレーシアは多民族・多宗教国家であることを反映してお互いを認め合う穏やかな国民性だと言われている。明確な自己概念を持っておらず、集団に同調する傾向が本調査での結果に反映されている可能性がある。

なお、日本とシンガポールでは因子構造が弱測定不変の仮定が成立することが確認された。その上で、各因子の平均値を比較すると、シンガポールは日本より外向的、「繊細」という結果が見られた。前者については、一般的によく知られている国民性のイメージとも合致する。ただし、シンガポールでは日本より外向性が好ましいとされるという結果が確認されており(日本の平均は2.45、シンガポールの平均は2.67、 $F=25.002$ 、 $p < .01$ )、社会的な望ましさを反映し

ている可能性がある。Alli et al (2010)では、社会的な望ましさが性格検査の結果に影響するという結果が報告されている。

一方、後者については一般に知られている国民性のイメージと合致しなかった。今回最終的に選択された「繊細-強靱」項目は、気分の変わりやすさや心配性であることなど、社会的に望ましくないと思われる項目が多かった。日本人は繊細である反面、繊細さを忌避する傾向が強く、その傾向が強く現れた可能性がある。しかし、今回の調査ではその仮説の根拠となる結果が示されなかったため、今後の検討が待たれる。

文献リストは当日ご案内いたします。

